

■研究十二月往来(226)

世阿弥を捉え直す

——思想研究のために——

重田みち

去る八月八日、世阿弥の命日に、能楽学会の一環として世阿弥忌セミナーが開かれ、「香西精の人と業績」という題で、氏の生誕百年を記念してシンポジウムが行われた。香西氏の研究の大きな柱の一つは、世阿弥伝書の語句の丹念な考証を通じた正確な解読の試みにあると言えよう。その点はシンポジウムでも十分に伝えられた。その一方で、それを推し進めたうえでの氏の世阿弥の思想自体についての考察(「世阿弥と禅」「世阿弥の芸論について」「世子芸案抄」等)に殆ど触れるところがなかったのは、いささか残念であった。これは香西氏の中でそれらの占める位置が小さかったと言うよりは、能楽論研究が下火になってしまっている近年の研究動向を反映しているように思われる。「研究十二月往来」は通常は研究内容を述べる場であるけれど、今回は特別に、そのような近年の動向に対する提言をしたい。

大凡昭和三十年代前半までは、能楽に関わ

る研究において、世阿弥能楽論の思想は最も注目されていた研究のテーマの一つであった。その後、世阿弥伝書や曲の詞章の、歴史的資料としてのよりよい本文・解釈が目指される傾向が強くなり、それまであまり行われなかった能楽の作品の歴史的研究が花開いた。同時に、能楽の舞台全体が意識され、一部の日本文学と日本音楽の専攻の研究者を軸として、能楽の演出面である所作や音楽的側面の歴史的な事柄も、曲の詞章と統合して研究されるようになった。さらに、明治以前から行われていた能楽社会史の研究も、日本文学・日本史学専攻の研究者を中心に盛んである。これが近年の能楽に関わる研究の主流であろう。これらの方法に共通するのは、能楽を実証を重ねて歴史的に捉えようとする視点であるので、今これを仮に歴史実証的研究と呼んでおきたい。さて、近年のこのような研究動向は客観的であり、最近の研究の質はよくなってきているとも言われる。確かに、これらの

研究に優れた面は多々認められる。しかし一方、世阿弥能楽論の思想そのものについての研究は下火になってしまった。なぜか。それは歴史実証的研究そのものの性格と深く関わるものと思われる。

歴史実証的研究とはどのように定義づけられるのであろうか。後述することからも明らかのように、これは「歴史観」とはまったく異なる。まずそれは、時(時間)に等速不可逆性を認める発想に基づいている。つまり過去から未来へという一定の方向に一定の速度で移行するという時の観念に則って、直線的な時系列のスケールを想定し、そこに「実証」された「過去の事柄」を位置付けていくのがその基本的な作業である。いわゆる年表はそれをよく表している。また、それらの「過去の事柄」を、社会的に彩られた表象として、より具体的に再現することが好まれる。歴史実証的研究はこのような性格を有しているから、当然の結果として形而下的な対象に注意が向く。したがって、それらの背後に思想的なものが窺われたとしても、その徹底的な追究や位置付けはされにくい。しかも、右のような時系列のスケールを重要な座標軸としているから、そのようなスケールを根拠から問い直す性質を必然的に持つ哲学的な研究、思想についての研究は、結局遠ざけられがちになってしまうのである。

また、歴史実証的研究においては、人の思考や言動の背後にいわゆる世間的な力関係や計算に敏感な性質を想定し、人々の言動をそのような事柄で説明する傾向がある。もちろん、人間一般にそのような側面があることは否定できない。しかし、人は必ずしもそのような論理に従って動くわけではない。とりわけ思索的な人物にとつては、別の側面がはるかに重要になることがあるのだ。思索的な人物とは、世間的な視点とともに、それとは別の視点を持ち、場合によってはそちらの視点をより重視する人物、世間的常識とは異なる世界観を強く持つ哲学的人物である。世阿弥も、その意味で哲学的人物と言うことができよう。ところが歴史実証的研究においては、人のこのような側面をまともに取り上げることが難しい。

もちろん、歴史実証的研究は、一つの有効な研究方法ではあろう。ただしそのような視点を絶対視しないことが必要である。なぜなら、その視点は、近代の洗礼を受けた我々にとつてはとりわけ親しみがあるため、それが当然で客観的であると思ひ込みやすいが、その客観性自体が問われるべきものだからである。

例えば、先述した時の観念は、時や時間に対する見方のうちの一つに過ぎず、決して動かぬ座標軸にはなりえない。そもそも、当の

世阿弥の時の観念は全く異なっていたことであろう。その詳論は別の機会に譲りたいが、ここではその入口として、循環する、再来するなどのイメージがあることに少しく触れておこう。それは能楽論の随所に窺われるが、例えば世阿弥は理想的な藝の在り方を四季折節に咲く「花」のめづらしさに譬え、

十体を得たらん為手は、同じことを一廻り一廻りづつするとも、その一通りの間久しかるべければ、めづらしかるべし。〔花伝〕第七別紙

などと説く。右の「一廻り」には、四季のように循環する時の観念が顕著に表れている。また世阿弥は、能の評価について、

出来庭（演能の出来具巳）を忘れて能（曲自体）を見よ。能を忘れて為手を見よ。為手を忘れて心を見よ。心を忘れて能（その能の全体）を智れ。〔花鏡〕「批判之事」

とも述べるが、この「忘る」という言葉は、決して永久に忘れ去るという意味ではなく、時は再来すると見る時にすんなりと読める。近代に優位な時の観念とは根本的に異なる見方が表れたものと見ることができ。このように時の観念というものは不動のものではない。

世阿弥の研究においては、その思想そのものの追究が不可欠であろう。その際、右のような時の観念をふまえておくことは、重要なことであると思われる。

世阿弥の思想そのものを追究された大事な一人として、西尾実氏が挙げられる。たとえば、西尾氏は戦前に「世阿弥の演能論に於ける『時』の意義」〔文学〕一九四一年九月）を發表された。右に述べた世阿弥の「時」に注目された文章で、具体的な筆致でありながら、哲学・思想に対する感性の鋭さ、意識の高さを窺うことができる。ところが現在、西尾氏の本文解釈には誤りが多いという理由で、きちんと読まれることは少なく、ともするとその存在すら忘れられかけている。しかし世阿弥の思想を真正面から捉えようとした氏の学問・研究の価値は、新たに見直されるべきであろう。

歴史実証的研究が信頼度の高いテキストを提供し、明らかな誤読を減らした意義は大きい。今は、歴史実証的研究とは異なる視点で世阿弥を捉え直す「時」ではなからうか。（立命館大学非常勤講師）